様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２０ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００６７５

研究課題名（和文）英語の間接行為指示文と談話構造の認知言語学分析

研究課題名（英文）A Cognitive Linguistic Analysis of Indirect Directive Constructions in English and their Discourse Structures

研究代表者
高橋　英光（Takahashi, Hidemitsu）

北海道大学・文学研究院・名誉教授

研究者番号：１０１４２６６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：　行為指示文とはー文で成り立つわけではなくしばしば他の行為指示文と共起する。本研究では、英語の15の間接行為指示文が談話の中でどの行為指示文と共起しやすいのかを明らかにした。具体的には、(i)英語の多くの間接行為指示文にとってもっとも使用頻度が高いパートナー構文は命令文であり、(ii)命令文に次いで使用頻度が高いパートナー構文は同一か同系統の構文であり、(iii)平叙文の間接行為指示文は疑問文のそれより命令文の共起頻度が高いこと、が判明した。本研究は行為指示文の談話構造の新しい研究法を提供していることにより発話行為研究に関心を持つ幅広い分野の研究者に大きな価値を持つものとなろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義
行為指示とは、他者に依頼、提案、命令などを伝える行為を意味しヒトの重要な言語コミュニケーションのひとつである。いかなる言語にも多彩な行為指示表現があるが、これまでの研究では行為指示の談話構造の分析が不十分であった。本研究が明らかにした英語の個々の行為指示文と他の行為指示文との共起可能性の全体像は、英語のみならず世界の様々な言語の行為指示文と談話構造の研究への道標となる。これらの成果は認知言語学・構文文法および語用論における発話行為研究の進展に大きく貢献し、行為指示の認知的・社会語用論的メカニズムの一端を世に示した社会的意義は非常に大きい。

研究成果の概要（英文）：Directive sentences are not normally used alone, but more often than not cooccur with other directive sentences. This research clarified the ways in which each of 15 different indirect directive constructions (=ID constructions) in English prefers to cooccur with which directive constructions. The main findings include: (i) The most frequent partner construction for many English ID Constructions is the imperative; (ii) The second-most frequent partner construction is an identical or closely related construction; and (iii) ID constructions in declarative form tend to cooccur with the imperative more frequently than those in interrogative form. By offering a fresh approach to analyses of directive constructions and their discourse structures, the present research will be of great value to scholars across a wide range of disciplines who are interested in speech act studies.

研究分野：認知言語学、語用論、

キーワード：行為指示　パートナー構文　間接行為指示文　談話構造

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

行為指示（directives）とは、他者に依頼、提案、命令などを伝える行為を意味する。行為指示を伝えることはヒトの重要な言語コミュニケーションのひとつである。いかなる言語にも多彩な行為指示表現があり、その中から話し手は文脈で最適の表現を選ぶことを試みる。行為指示についての古典的先行研究は命令文の「無礼さ」を強調してきた。リーチ(Leech 1983: 108)は「ポライトネスのスケール(scale of politeness)」を提案し、命令文と様々な間接行為指示文は表現の間接性とポライトネスの階層をなし、例えば、命令文 Answer the phone は間接行為指示文（Can you answer the phone?や Would you mind answering the phone?など）より直接的な表現であるためポライトネスの度合いが低いと分析した。言語行為論者のサールは「単純命令文(例えば“Leave the room.”)の使用はポライトネスの点で不格好」(Searle 1979: 36)と述べ、語用論研究者のヴィアズビッカは「英語の命令文の使用に課せられる重い制限」を指摘した(Wierzbicka 2003: 30)。以上の定説には「行為指示文はサイズが大きいほどポライト」で「間接行為指示文は命令文のポライトな言い換え」という前提が潜んでいる。

しかしもしこの前提が事実なら、英語話者は命令文の使用を避けて代わりに間接行為指示文を多用するはずである。しかし当該研究者の統計調査では、英語の間接行為指示文の使用数はすべてを合計しても命令文の 15 分の１程度に過ぎなかった(Takahashi 2012: chap.4)。この結果は、言語学・語用論の定説や前提に重大な不備があることを示唆する。その主な原因は、(i)大部分の研究が実例の観察を重視せずに作例と直感に依存し動詞の頻度と項構造の観察を怠ったこと、(ii)行為指示文の談話構造の考察が不十分であったこと、にある。先行研究の限界(i)を克服するために、当該研究者はまず 2013 年より英語の個々の間接行為指示文の高頻度の動詞とその用法の調査・分析に着手した。その結果、(i)行為指示文全体でもっとも使用頻度が高い動詞は伝達動詞 tell であり、(ii)構文によって使用頻度の高い動詞が異なり（例えば、Can you 構文では伝達動詞(tell, explain, talk, describe)の頻度が高いが Why don’t you 構文では go と come の使用頻度が高い)、(iii)命令文で頻繁に起こる「動詞+１人称目的語」項構造(Takahashi 2012)は間接行為指示文でも観察されるがこの項構造を具現する動詞の種類が構文間で異なること、(iv) tell と give の二重目的語用法の項の具現形も構文間で隔たりがあること、などの知見を得た（基盤研究(C) 2537054003「英語の間接指令構文の認知言語学的研究」(2013-2015)及び基盤研究(C)16K02752「英語の間接指令構文の包括的認知言語学研究」(2016-2019)）。

行為指示は通常１文で成り立つわけではない。行為指示の談話ではしばしば複数の行為指示文が共起し意味と機能が有機的につながっている。この事実を踏まえると先行研究の限界(ii)の克服には、多様な行為指示文の実例データを観察してその使用パターンを分析することが必要となる。その第一歩として、当該研究者は英語の多様な行為指示構文同士のこれまで見過ごされてき共起可能性に着目した。

２．研究の目的

当該研究者は、2012 年に英語命令文の包括的認知言語学研究を出版し、2013 年から命令文と関連の深い間接行為指示文の分析を主に動詞の観点から行ってきた。その結果、間接行為指示文と命令文の間にも間接行為指示文同士にも動詞とその用法に共通点のみならず特筆すべき相違点があることが明らかになった。しかし、間接行為指示文の全容の解明には談話構造の分析が不可欠であるにもかかわらず、この分野の研究は未だ不十分である。本研究の目的は、(i)個々の行為指示文が談話の中でどの行為指示文と共起するのかを明らかにし、(ii)個々の行為指示文が談話文脈に表れる位置を特定し、(iii)(i)と(ii)の成果を受けて間接行為指示文の談話構造を語彙と文法構造に考慮しつつ社会語用論的・認知言語学的特徴付けを行うことであった。以上の考察は個々の行為指示構文の特性の理解を深めると同時に、英語の行為指示談話のメカニズムを浮き彫りにすることになる。

３．研究の方法

このプロジェクトでは、まずアメリカのミステリー小説 28 編を基礎データとして用いた。具体的には、以下の英語の 15 種類の間接行為指示構文がミステリー小説の中で使われている談話を収集した。

1) Can you, 2) Why don’t you, 3) I want you to, 4)Will you, 5) Would you,
6) Could you, 7) I need you to, 8) Can’t you 9) If you would/could,
9)Why not, 11) Would you mind, 12) I wonder if you can/could/would,
12) I’d appreciate it if you could/would, 12) I would like you to, 15) Won’t you
（掲載順は使用頻度順）

次の段階としてこれらの個々の間接行為指示文が何らかの他の行為指示文と共起する談話を収集した。収集されたデータを詳細に分析して、個々の間接行為指示文がどのような行為指示文と共起しやすいのか、つまりどのような行為指示文が「パートナー構文」になりやすく、同時にどのような行為指示文が「パートナー構文」になりにくいのかを特定し、語彙、文法構造、対話者の社会関係を考慮しながらその動機を分析・考察した。

４．研究成果

英語の間接行為指示文とそのパートナー構文、つまり他の行為指示文との共起性の調査結果を以下の表に示す。本研究の成果は以下の３点に要約できる。

(1) 間接行為指示文のパートナーにもっともなりやすい行為指示文は命令文である。間接行為指示文 15 種のうち 13 が命令文と共起していた。命令文の共起例がなかったのは I wonder if you と Would you mind (VPing)?の２構文のみであった。

(2) 命令文のつぎに間接行為指示文のパートナーになりやすいのは （共起頻度ははるかに低いが）同一か同系列の間接行為指示文である。15 種の間接行為指示文のうち 7 構文―I need you to, I want you to, I wonder if you, Will you, Why don't you, Could you, Can you―で同一の構文が命令文に次いで共起率が高かった。逆に言えば、行為指示の種類が異なる間接行為指示文同士や助動詞の系統が異なる間接行為指示文同士はパートナーを組みにくい。提案構文の Why don't you と依頼構文の Can you 構文が共起する談話例は見られなく、Can you 構文と Will you が共起する談話例は非常に稀であった。

(3)平叙文型の間接行為指示文は疑問文型より他の行為指示文、つまり命令文を伴いやすい。行為指示構文と共起数が多い上位４構文（I need you to, I'd appreciate it if you, I'd like you to, I want you to）はすべて平叙文であり、ランキング下位の間接行為指示文は（条件節の If you'll/'d を除き）すべて疑問文である。

(1)の命令文が間接行為指示文のパートナーになりやすい主な理由は、命令文の意味の可塑性・抽象性にある。英語の命令法は動詞の不定詞形で表示され非現実・仮定性しか表さない。命令文はある命題を仮定世界に提示するだけであり（Takahashi 2012: chap. 1)、依頼とか指示、命令など特定の種類の行為指示を表さない。命令文のこの意味特性が多種多様な行為指示、つまり命令、指示、依頼、懇願、提案、助言、威嚇などと容易に適合する機能的柔軟性をもたらす。

(2)の同一・同系列の間接行為指示文が異種の間接行為指示文よりパートナー構文になりやすい現象は、談話の一貫性の観点から説明が可能である。一つの談話に異種の行為指示文が共起すると談話の目的、つまり行為指示の目的、が誤解されコミュニケーションの混乱を招く。その一方で、同一か同系列の間接行為指示文が命令文よりパートナー構文になる頻度がはるかに低い現象は興味深い。その一つの要因は命令文の意味の可塑性・抽象性に由来する多種多様な行為指示との適合性にあるが、もう一つの重要な要因は、コミュニケーションの経済性・効率性にあると想定される。つまり間接行為指示文は一般に統合サイズが大きいために発話にも処理にも時間がかかる。つまり認知処理のコストが高い。

(3)の平叙文型の間接行為指示文は疑問文型より命令文を伴いやすい理由は、前者は一般に提案や指示を伝えるが後者は普通依頼を伝える事実が大いに関与する。依頼とは主に（聞き手ではなく）話し手の利益のために行われるため相手の面子に配慮した慎重で間接的表現が求められる。しかし提案や指示はそうではなく直接的な表現が相応しい。命令文の使用頻度が高いのは理にかなっている。

命令文が間接行為指示文のパートナー構文として高い頻度で使用される現象の背後には、認知言語学の認知スペース（あるいはメンタルスペース）が作用している。例えば、談話の開始時に Why don't you 構文が現れると会話者の脳内には提案という認知スペースが設定される。この結果、後続する命令文の発話は（依頼や懇願などではなく）提案と特定される(Takahashi 2023)。また、談話の開始時に Can you 構文が使われると依頼という認知スペースが脳内に立ち上がり、後続する命令文は（他の行為指示ではなく）依頼と容易に解釈される。

間接行為指示構文は、一般に社会語用論の分野で論じられるが、社会語用論に加えて認知言語学的アプローチをとる点に本研究の独自性がある。その一方で、これまでの認知言語学と構文文法研究は行為指示と動詞を中心とする語彙の関係について優れた知見を生み出したが談話構造の考慮がはなはだ不十分であった。本研究は、個々の行為指示構文の特性の理解を深めると同時に行為指示の談話構造の新しい分析法を提供した。本研究は、これまでの認知言語学の重大な弱点とされる談話と社会語用論的考慮の欠如（Dąbrowska 2016）の克服にもつながり、認知言語学の包括的発話行為研究を大きく前進させるものである。なお、今後は、大規模な会話コーパスを使用して間接行為指示構文の共起性について本研究で得られた成果の検証と修正を行う。

表 間接行為指示文のパートナー構文の内訳（種類と用例数）

間接行為指示文	パートナー構文の種類と数
I need you to	30 例中 16 例(53.3%)が行為指示構文（４種類）と共起。命令文（13 例=前置 4、後置 7 で、両方が１例)、I need you to, Can you, Would you mind が各１例。
I ’d appreciate it if you	13 例中 6 例（46.1%）が行為指示構文（5 種）と共起。I wonder if you が 2 例で、命令文、I want you to, I ’d appreciate it if you, Can you が各１例。
I ’d like you to	12 例中 5 例（41.7%）が行為指示構文（3 種）と共起。命令文（3 例、すべて後置）で Will you と I want you to が各１例。
I want you to	143 例中 59 例（41.3%）が行為指示構文（7 種）と共起。命令文が 38 例（前置 13、後置 20、両方 5)、I want you to（13 例）で Will you（3 例)、Can you（2 例)、I ’d like you to と Why don ’t you, I would appreciate it if you が各１例。
Won ’t You	5 例中２例（40%）が行為指示構文（２種）と共起。命令文と Will you が各１例。
Why Not	13 例中 4 例（30.8%）が行為指示構文（2 種）と共起。命令文と Why don ’t you が各 2 例。
I wonder if you	13 例中 4 例（30.8%）が行為指示構文（2 種）共起。I wonder if you と I ’d appreciate it if you が各 2 例。
Can ’t you	34 例中 10 例（29.4%）が行為指示構文（3 種）と共起。命令文（8 例、let ’s を１例含む)、can ’t you と will you が各１例。
Will you	108 例中 23 例（21.3%）が 7 種の行為指示文と共起。内訳は、命令文（11 例＝前置 3、後置 8)、Will you（3 例)、I want you to と Would you が各 2 例、I would like you to, Won ’t you, Can you, Can ’t you が各 1 例。
Why don ’t you	169 例中 35 例（20.7%）が行為指示文（5 種）と共起。命令文 26 例（前置 7 例、後置 18 例、両方 1 例)、Why don ’t you と Why not 各 2 例、I want you to と Would you 各１例。
Could you	54 例中 11 例（20.4%）が行為指示文（3 種）共起。命令文（5 例＝前置 3 例、後置 2 例)、Could you（5 例)、Would you（1 例)。前置命令文 3 例はすべて excuse me。
If you ’d / ’ll	17 例中３例（17.6%）が行為指示文（6 種）と共起。Would you mind が 2 例（前置と後置が各１例)、命令文 1 例、なおこの構文 17 例中 8 例が if you ’ll excuse me.
Can you	229 例中 37 例（16.2%）が行為指示文（6 種）と共起。命令文 26 例（前置 14 例+後置 12 例)、Can you（7 例)、I want you to（2 例）で、I ’m wondering if you, Will you が各１例。
Would you	92 例中 7 例（7.2%）が行為指示構文（6 種）と共起。命令文 2 例（前置）と Can you, Could you, I wonder if you could, Would you mind, Why don ’t you が各１例。
Would you mind	13 例中 1 例（0.7%）が行為指示文（Would you）と共起。命令文が共起する例なし。

（Takahashi 2023）

参照文献

Dąbrowska, E. (2016) “Cognitive Linguistics’ seven deadly sins.” *Cognitive Linguistics* 27(4), 479-491.

Leech, G. (1983) *Principles of Pragmatics*. London: Longman.

Searle, J. R. (1979) *Expression and meaning: Studies in the theory of speech act*. Cambridge University Press.

Takahashi, H. (2012) A *cognitive linguistic analysis of the English imperative: With special reference to Japanese imperatives*. John Benjamins.

Takahashi, H. (2023) “Another glance at English directives: How different directive

constructions prefer to cooccur in discourse." Paper presented at the 18th International Pragmatics Conference, 9-14, July, Brussels, Belgium.
Wierzbicka, A. (2003) *Cross cultural pragmatics: The semantics of human interaction*. De Gruyter Mouton.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 高橋英光	４．巻 vol.6
２．論文標題 認知言語学における文法と語用論の融合を展望するー言語行為と文法構造	５．発行年 2021年
３．雑誌名 認知言語学研究	６．最初と最後の頁 110-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋英光	４．巻 ー
２．論文標題 動詞と談話文脈から見たWill you依頼文　発話行為と認知言語学	５．発行年 2021年
３．雑誌名 認知言語学の最前線　山梨正明教授古希記念論文集	６．最初と最後の頁 125-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋英光	４．巻 第17号
２．論文標題 英語の行為指示文と談話構造―行為指示文同士の共起関係を探る	５．発行年 2023年
３．雑誌名 認知言語学論考	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋英光	４．巻 3
２．論文標題 アメリカ英語における間接行為指示文の使用の変遷 ― COHAからわかること―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論	６．最初と最後の頁 101-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 高橋英光
2．発表標題 動詞の使用頻度と項構造から見た英語の行為指示表現
3．学会等名 東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」主催 第6回ワークショップ（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 Hidemitsu Takahashi
2．発表標題 Another glance at English directives: How different directive constructions prefer to cooccur in discourse (accepted)
3．学会等名 The 18th International Pragmatics Conference（国際学会）
4．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関